

志位和夫 独占インタビュー

共産党が大躍進

ダメ野党の中、唯一気を吐く



「3つの秘密」

高笑いの心境？

所得を増やす矢は一本もありません。逆に、国民から所得を奪う矢ばかりです。

たとえば、成長戦略の司令塔の役割を担う「産業競争力会議」では、自由に雇えるように変えよう、残業代をゼロにしようとの議論が進んでいる。雇用のルールを破壊するものです。

さらに、アベノミクスには隠れた矢があります。「社会保障の切り下げ」と「消費税増税」という「二つの毒矢」です。消費増税が10%になれば13・5兆円の大増税。安倍政権は空前の大増税をやるうとしている。

つまり、今の自民党政権では、不況から脱出できるどころか、日本経済は破局

都議選の分析や参院選を語るには、まず安倍晋三内閣のアベノミクスがいかにか国民を苦しめているのかを示さなければなりません。そもそもデフレ不況の原因は、長期間にわたる国民所得の減少によるものです。1997年をピークに、10年以上も給料が減り続けています。デフレ脱却の処方箋は国民の所得をいかに増やすか、これに尽きます。ところが、アベノミクスの三本の矢を見ると、国民の

し、財政危機も酷くなる。暮らし、経済、財政を全部破壊するのが、アベノミクスの正体なんですよ。

舌鋒鋭くアベノミクス批判を展開する志位委員長。改めて都議選躍進の秘密を聞くと、「3つの要因」があると明かした。

都議選で倍以上の議席を獲得した要因として、3点を考えています。

一つは、安倍政権に対して不安感、危機感を抱いている人々が広がっていることを実感しました。経済面では自分たちの暮らしが改善しない。さらに憲法9条を「改悪」して、海外で競争する国につくり変えることへの危機感が高まってい

ます。原発にしても不安だらけ。「原発依存からの脱却」という言葉すら無くしてしまい、再稼働と原発輸出にまい進する。この政治姿勢は国民の利益に反します。私たちは堂々と安倍政権を批判し、「対決者の党」を打ち出し、「自共対決」を掲げて戦い抜きました。二つ目として、それぞれの分野で抜本的打開策を明らかにしました。たとえば、経済政策でアベノミクスを批判する一方で、国民の所得を増やして景気を回復させる策を打ち出した。具体的には、大企業が抱える2



都議選では伸びたが…(共同)



野党共倒れも共産党を利した

60兆円の内部留保の一部を活用すれば、賃上げに充てられる、非正規社員の正社員化ができる、中小企業の下請け代金の適正化が可能になるなどです。そうならば消費が増え、内需も活性化して経済を健全な成長軌道に乗せることができず。つまり、共産党版の成長戦略を提案したのです。徹底的な批判とともに「建設者の党」として代案を出しました。この姿勢も大切だと考えています。

三つ目は「情勢の変化」があげられます。それは共産党排除という「二つの反共作戦」の失敗です。

2003年の総選挙以来、自民党か民主党か、と

いう2大政党による政権選択論が猛威を振るいました。共産党にとっては、蚊帳の外になる苦しい構図でした。選択肢から外されてしまったからです。派遣労働が問題視され、小説『蟹工船』が再び注目されましたが、共産党の前進を阻止する強い力が働きました。09年の政権交代選挙で民主党は政権を担ったものの、国民の政治を変えてほしいという願いをことごとく裏切った。公約を破棄して消費税増税法案を強行するなど、その実態は自民党と何ら変わりがなかった。民主党は完全に信頼を失って、2大政党制はすっかり廃れたといつていいでしょう。

もう一つの反共作戦。それは民主党政権に純ひが見え始めたころ、2大政党論に代わって台頭してきた「第三極論」です。既存政党には任せられない、新たな勢力に期待するというのも12年12月の総選挙がピー

クだったと思います。第三極の主役だった日本維新の会やみんなの党は、今や憲法改定に賛成する姿勢などを見せていて、自民党の補完勢力にしからずまません。第三極の実態はまやかしじやないか、と国民の多くは疑念を持つようになりました。

このように、共産党排除の二つの仕掛けがうまく働かなくなりました。すると、政界の見晴らしが良くなり、「自民党対共産党」が真の対決軸じやないか、と多くの国民から見えやすい状況になってきた。こうした情勢の変化により、私たちの訴えがより広く届くようになったと理解しています。

はいい、都議選で共産党の得票率は13・61%。前回(09年)の12・56%からすれば、1・05%の伸びです。これでも倍増したのは、各党の立候補者の組み合わせや、民主党に見られる複数擁立による共倒れなどが要因だったのは事実です。

議席の確保が「最大のミッション」です。加えて、いくつかの選挙区で議席獲得の条件が生まれていますから、大いに風穴を開けたい。目標数値は5議席プラスアルファです。

都議選では、駅前宣伝に重点を置いたり、若い子育て世代に訴えるために保育所前宣伝、メガホン宣伝隊の活躍などで手応えを実感しました。実績に繋がった手法を全国で展開し、多くの有権者の皆さんに理解していただきたい。

参院選は、参院選の前哨戦として躍進しうる条件を作りましたが、自動的に躍進に繋がるとは思っていません。参院選の比例代表は、政党の地力が試される選挙です。得票率が1%上がったからといって、議席が倍増することはない。だから、「勝つて兜の緒を締めよ」の言葉通り、改めて気を引き締めて参院選に取り組みでいきたい。

共産党の「国家像」とは…

では、具体的に共産党は参院選をどう戦うのか。また参院選後に「野党再編」が囁かれる中、共産党はどのような立ち位置で行動していくのだろうか。参院選は、比例代表で650万票以上を獲得し、5

力関係を築いてきました。 TPP(環太平洋パートナーシップ協定)の問題では、JA(農協)の皆さんと協力関係を築いてきました。

橋下と石原



大いなる虚像

このように一つひとつの問題に対し、協力し合える方々との「共同」を今後も探求したいと考えています。国会内での野党共闘もそうです。安倍政権は、参院

選後に憲法96条の先行改定に着手したいようですが、反対する党とはどんな共闘していきます。他の政策では全く違う考え方であっても、その法案の取り扱い

方が同じ考え方だったら手を繋ぐ。一点突破の「一点共闘」を進めていきます。さらに、私たちは民主連合政府を目指します。野党のままでいいとは思って

ません。単独政権でなく連立政権が目標です。その際の国家像は、異常な米国言いなり国家や、異常な大企業中心主義を糺し、国民が主人公の民主主

義国家を作る。国政を根本から変える国民的合意ができれば連立政権は可能で、それが当面の目標ですね。構成/ジャーナリスト・山田厚俊

「西」から飛んでくる罵声
1カ月遅れでしか選挙情報もとれない
参院選挙区「当選」は大坂だけ？
分裂を覆い隠す老獪な面々

ジャーナリスト

鈴木哲夫

予想通りの大惨敗だった。

6月23日投開票の東京都議選。日本維新の会は34人を擁立したが、当選は現職、新人の2人だけ。そして、選挙後は「引責騒動の茶番劇」。橋下徹共同代表は告示前に「代表辞任もあり得る」と明言していたが、石原慎太郎共同代表は「いまになって陣容を組み直すわけにはいかない。関ヶ原の戦い（参院選）はすぐそこ」と言う。橋

下氏自らも「参院選は戦う」と、両代表が参院選を口実に責任問題を先送りした。

維新はそもそも誰が選挙を仕切るのか、その基本的な体制がいままだ。

維新の国会議員たちに「選挙の責任者は誰か。他の政党は幹事長だが……」と問うと、人によって、また選挙の種類によって実に多くの答えが返ってくる。ざっとこんな調子だ。

「もちろん幹事長だ。国会議員団の幹事長じゃない。本体のほうだから松井一郎さん」「都議選は山田宏（衆議院議員・都総支部代表）さんが責任者。地元だし詳しい」「参院選は東は東、西は西でそれぞれやることになる。東は石原、西は橋下。応援日程なんかもそれぞれで決める」

こうしたちがはぐな選挙体制が摩擦を起こしてい

る。たとえば、参院選のみんなの党との選挙協力が破綻し、関東地区のある維新支部は、候補をどうするか躊躇した。大阪とは違い、維新単独での選挙戦は厳しいからだ。

「選挙基盤となる組織が関東にはありません。地方議員もほとんどいないから後援会もない。みんなの党にはそれがあつたから、組むのがベストだったんですけど

ね」（関東の維新支部長）
そうなるかと単独で出る候補はなかなか見つからない。頭を抱えているところへ、その支部に「西」の松井幹事長から連絡が入った。

「降りるなんて許さん」
地域事情を何度も説明したが、松井氏は聞く耳など持たなかったという。最後は怒鳴り声だった。

「不戦敗なんか絶対許さへんからな。必ず出せ！」
この支部長は言う。

「大阪と関東は違います。地方選挙と国政選挙も異なる